



随筆を書く

題材

構成

考えの形成・記述

推敲

共有

目標

●身近に起きたことや経験したことをまとめて、
叙述の仕方を考える。

芥川龍之介は夏目漱石の家を訪れた時のことを、漱石の没後に次のように回想しています。

夜寒の細い往来を爪先上がりの上って行くと、古ぼけた板屋根の門の前へ出る。門には電灯がともっているが、柱に掲げた標札のごときは、ほとんど有無さえも判然しない。門をくぐると砂利が敷いてあって、そのまた砂利の上には庭木の落ち葉が紛々として乱れている。(中略)

机の後ろ、二枚重ねた座蒲団の上には、どこか獅子を思わせる、背の低い半白の老人が、あるいは手紙の筆を走らせてたり、あるいは唐本の詩集を翻したりしながら、端然と独り座っている。……

漱石山房の秋の夜は、こういう蕭条たるものであった。

(『漱石山房の秋』)

坂道を「爪先上がり」、落ち葉も「紛々として乱れて」と独特に表現しています。漱石が創作に励んだ住まいの描写には、漱石を追慕する気持ちが生み出されています。

随筆を書く際には、まずは身近に起こったこと、経験したこと、感動したことを思い浮かべます。

次に、その経験から自分が何を新しく発見したか、自分にとってどんな意味があるか、を考えます。

それから、書こうとすることにふさわしい、もつとしい言葉はないか、探します。例えば、「感動する」という表現のほかにも、「心に響く」「琴線にふれる」など、違う表現があります。季節を表す言葉は季語辞典、同じ意味の言葉を探すなら類語辞典を活用するとよいでしょう。教科書の中にも多彩な表現があります。

私たちの身のまわりには、随筆の材料がたくさんあります。自分にしか書けない、感動と発見を文章にまとめましょう。

15

10

5

